

九州周辺島嶼におけるスギザイノタマバエの分布

林業試験場九州支場 吉 田 成 章
 宮崎県林業試験場 讀 井 孝 義
 鹿児島県林業試験場 国 生 定 男

1. はじめに

スギザイノタマバエは1952年宮崎県えびの地方で最初に発見されたがそれ以前の分布についてはほとんどわからなかった。えびの地方の過去の材中に残っている材斑の調査からも1944年程度までしかのぼれるだけで、それ以前に存在しなかったことを裏づけている。また、その他の九州本島の古いスギの調査でも1944年以前の材斑はみつからなかった。このことから、以前から九州本島南部に生息していたとは考えられない。分布速度が年8Kmと試算されていることから、もし古くから存在していたものなら、1952年の時点で九州全域に分布していても不思議ではないはずである。突然変異で害虫化したとでも考えなければつじつまが合わないで、やはり侵入害虫と考えるのが妥当ようである。九州本島以外では、本州・四国の古いスギ林業地域で分布していないことが確認されているので、残された地域は九州周辺の島嶼である。そこで、いくつかの島嶼について調査を行った。

2. 調査方法および調査地・調査結果

調査方法はスギ粗皮のはく皮によって皮紋あるいは幼虫を確認する方法によった。また、過去のものについては材斑の確認によった。

1979年3月吉田は奄美大島の調査を行った。この島の国有林内のスギ林は狭く林齢も20年前後でスギザイノタマバエは分布していなかった。その後の営林署の調査でも存在しないことが確認された。1980年3月著者らは屋久島と種子島の調査を行った。屋久島での調査は原生林中のスギ、土場に出されたスギ丸太、造林地のスギおよび屋久杉工芸品であった。原生林中のスギは粗皮のはく皮ができなことから粗皮表面の皮紋および幼虫の調査をした結果、皮紋を確認し、数頭の幼虫を採集した。土場および製品事業所に集積された天然スギ木口での材斑を調査したが、材斑がみられるものは極めてわずかであった。ところが、あるレストランに工芸品として飾られていたスギ円盤に750年前の材斑を観察した。また花瓶敷として作られたスギ材片上の150年前の年輪に材斑をみた。多くの小工芸

品中に材斑がみられた。花瓶として作られた工芸品では材斑部分がうまく利用されており、陶磁器の趣をもつものもあった写真-1。造林地のスギは、主にヤクスギの実生ということであったが、かなりの被害を受けている個体とほとんど皮紋のない個体とがあった。この造林地で多数の幼虫を持ち帰り、正確な同定を行った。また、この幼虫に寄生天敵はいなかった。捕食性タマバエ・ミツシハマダラタマバエは存在した。

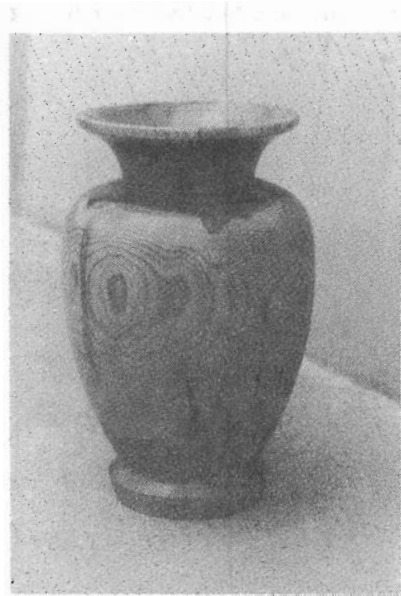


写真-1 工芸品の花瓶にみられる材斑

種子島ではスギ造林は新しく、20年前後であるが、これらのスギにはほとんどの林分で皮紋と幼虫が存在した。いくつかの林分では広い材斑のある個体もみられ、激害の様相を示す林分もあった。

1980年8月林業試験場九州支場の竹谷昭彦、倉永善太郎の各氏と吉田は奄岐島の調査を行ったが、まったくスギザイノタマバエは存在しなかった。

3. 考 察

この調査で九州本島より古い被害が屋久島で発見されたことから、スギザイノタマバエはかなり古い時期

から、いわゆる屋久スギといわれるものに寄生して生息していたものと思われる。また、これらに激害状態のものがみられない理由は、これらの原生林中のスギ密度が極めて低い(3~4本/ha)ことからスギザイノタマバエ密度が高くなり、細々と生息していたためであろう。スギ樹幹に材斑がほとんど見られず、小工芸品にみられるのは、これらの小工芸品が枝から作られることから、本幼虫は主に枝に生息しているものと思われる。主幹は粗皮が厚く、写真-2にみられるように600年生の樹で6cm程度もあることから、たとえ産卵されたとしても、1齢幼虫は粗皮中で死亡することとなり、ある樹齡に達すれば主幹は生息場所となりえないようである。

屋久島での生態はあまりはっきりしないが、3月の調査時に蛹がみられたことから、羽化時期はかなり早いものと思われる。天敵調査の時期が良くなかったため寄生蜂は発見できなかったが、古い害虫生息地の天敵は侵入害虫にとって有効であるといわれていること

から、天敵採集のための再度の調査が必要である。

屋久島でのヤクスギ実生林の調査で個体毎に皮紋数に大きなむらがみられたことから、実生林では比較的強い抵抗性をもった個体が最後に残り、ある程度健全な林を構成するのではないかと思われた。

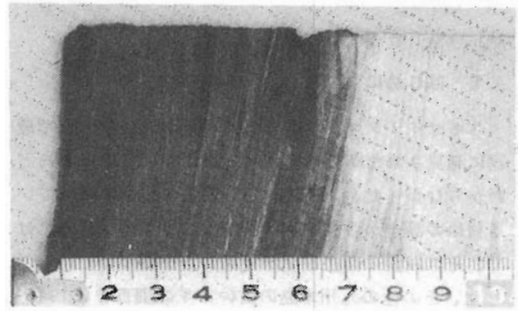


写真-2 粗皮の厚いヤクスギ